

# AO入試改善を巡る学内外の評価

— 鳥取大学 AO 入試に関する諸調査結果から —

福島真司（鳥取大学）

鳥取大学では、AO入試の評価について、AO入試実施後に、受験する側である受験生・高校教員及び入試を実施する側である学内教職員の双方にアンケート調査を実施し、双方向からAO入試の評価を行っている。本稿は、この調査結果に見られるAO入試改善を巡る学内外の評価に関するギャップから、AO入試の評価方法について、一考察を述べるものである。

## はじめに

日本の高等教育機関は、今まさに「評価」の時代を迎えている。平成17年1月に発表された「我が国の高等教育の将来像（答申）」においても、「学習者の保護や国際的通用性の保持のため、高等教育の質の保証が重要な課題となる」と述べられており、「評価」は、高等教育の質を保証する方策として、今後ますます重要な位置づけになることが予想される。

国立大学法人の評価に関する制度については、平成11年度より自己点検・評価の公開が義務化され、平成16年4月1日国立大学法人化以後は国立大学法人評価を毎年度受け、平成16年度からは7年に一度機関別認証評価を受けることが義務づけられることとなった。

さて、国立大学(法人)AO入試は、東北大学、筑波大学、九州大学が、国立大学として初めてAO入試を導入してから8年目を迎えた。この間、学部・学科単位では、AO入試による選抜をやめたケースはあるが、大学単位でAO入試をやめた事例はまだ見られない。それどころか、AO入試による選抜は年々増え続ける傾向にある。平成12年度入試において3大学8学部で始められたAO入試は、平成18年度入試においては29大学92学部で実施された。募集人員についても、平成18年度入

試においては国立大学法人全体で2,006人となっており、これは国立大学法人の総募集人員である96,226人の2.1%に当たり、初めて2%を超えた。これはAO入試が一定の「評価」を受けた結果だと考えられるが、それでは、AO入試には具体的にどのような「評価」がなされているのであろうか。

本稿は、AO入試の評価のあり方を議論することを目的とする。まず始めに、国立大学法人に義務づけられている大学評価の中の入試評価を概観し、問題点を整理する。その後、鳥取大学アドミッションセンター(以下、AC)が実施しているAO入試に関する諸アンケート調査結果から、鳥取大学AO入試の改善に対する高等学校側の評価、大学教職員の評価を報告し、そこに見られる差異から、AO入試評価について、一考察を述べるものである。

## 1 大学評価における入試評価について

### 1.1 国立大学法人評価における入試評価について

国立大学法人評価は、それぞれの国立大学法人が掲げた教育研究活動の中期目標等に対する業績評価の性格を持つものである。これは、中期目標とそれを達成するための中期計画に沿って、その達成状況が評価されるとい

うシステムである。

この評価においては、各大学が掲げた中期目標・中期計画における「Ⅱ 大学の教育研究等の質の向上に関する目標」「1 教育に関する目標」「(2) 教育の内容等に関する目標」に記載されている入試制度についての記述が重要になる<sup>1)</sup>。

各大学とも、中期計画においては、「点検」「事後評価」「評価分析」「改善」「充実」「改良」「適正化」「見直し」等の用語を用い、自大学で実施している入試に関して、自らが点検・評価し、改善等に役立てようとする記述を行っている。ただし、中期計画中には、具体的な点検・評価の方法についての記述は、入学後成績追跡調査が挙げられているだけである<sup>2)</sup>。改善に関するプロセスについては、各大学さまざまな記述があるが、これについては福島(2006)を参照されたい。

## 1.2 機関別認証評価における入試評価について

機関別認証評価を実施する認証評価機関のうち、国立大学法人が評価を受ける独立行政法人大学評価・学位授与機構の評価基準について見ると、入試(学生の受入)評価について、留学生、社会人を除く、いわゆる「伝統的な学生」を対象にした選抜方法に関する記載は、大きくまとめて次の3点に絞られる。すなわち、「アドミッションポリシー(以下、AP)の公表」「APに沿った適切な受入」「適正な実入学者数」の3点である。しかしながら、「学生の受入」が「適切」であるかどうかを、どのような観点から評価するのかという具体的な評価基準については、ここには記載されていない<sup>3)</sup>。

## 2 鳥取大学 AO 入試の評価について

前章では、制度上の大学評価における入試に関する評価について述べたが、それでは、

入試を実施する主体である各大学は、それぞれの大学が実施している AO 入試をどのように評価しているのか。各大学が実施している入試に関する調査については、入試方法ごとの入学後成績調査が主流である。すなわち、一般選抜や、推薦入学等他の入試方法での入学者に比して、AO 入試による入学者の入学後学業成績がよいか悪いかで、その成否を評価するものである。最近では、白川ほか(2004)に見られるように科目ごとに分類した上で詳細に AO 入学者の入学後学業成績を追跡するものや、学業成績以外に着目して AO 入学者の特性を捉えようとした渡辺(2005)、渡辺・島田ほか(2006)のようなユニークな調査研究の事例も見られるようになってきた<sup>4)</sup>。

以下では、鳥取大学 AC が AO 入試に関して行っている調査をもとに、鳥取大学 AC が、AO 入試に対する評価をどのように実施しているかについて述べる。

### 2.1 鳥取大学 AO 入試実施概要

鳥取大学 AO 入試は、平成 16 年度入試より 3 学部 13 学科(課程)で導入している。鳥取大学は、国立大学としては 17 番目の導入であったため、先行諸大学の事例を研究し、初年度である平成 16 年度 AO 入試を実施した。

実施日程及び方法は、次の表 1・2 のようである。

表 1 鳥取大学 AO 入試実施日程

	平成 16 年度	平成 17 年度
エントリー	7 月 14 日～18 日	
面談授業体験	8 月 4 日～5 日	
出願期間	9 月 12 日～18 日	9 月 14 日～21 日
第 1 次選考	発表までの期間(審 類選考のみで実施)	9 月 27 日～10 月 10 日(うち 13 日間)
結果発表	10 月 6 日	10 月 16 日
第 2 次選考	10 月 16 日～17 日	10 月 23 日～24 日
合格発表	10 月 30 日	11 月 1 日
入学手続き	11 月 4 日～5 日	11 月 15～16 日

表2 鳥取大学 AO 入試実施方法

	平成16年度	平成17年度
エントリー	工学部のみ実施 (他は実施せず)	実施せず
第1次選考	書類選考のみ (AO入試実施委員会による実施)	書類及び面接 (AC専任教員による実施)
第2次選考	APに沿った、多様な選抜方法を実施 (学科による実施)	前年度に同じ

平成16年度と平成17年度では、実施日程及び方法が異なっている。これは次項で述べる調査結果をもとに変更を加えた結果である<sup>5)</sup>。

## 2.2 鳥取大学 AO 入試に関する諸調査について

鳥取大学 AC では、AO 入試の実施に際して、諸アンケート調査を行っている。

- ① AO 入試に対する評価等を、鳥取大学 AO 入試志願者を出した全ての高等学校の進路指導主事、クラス担任に聞く調査(以下、高校教員調査)
- ② AO 入試に対する評価等を、鳥取大学 AO 入試合格者に聞く調査(以下、合格者調査)
- ③ AO 入試実施に対する評価等を、今年度 AO 入試実施に実際に関わった全ての鳥取大学教職員に聞く調査(以下、学内調査)  
それぞれの調査概要については、次のようである。

### ① 高校教員調査

平成15年11月及び平成16年12月に、アンケート票を高等学校に郵送することにより実施。平成15年は配布266通に対して148通返送(回収率55.6%)、平成16年は配布168通に対して88通返送(回収率52.4%)。

### ② 合格者調査

平成15年11月及び平成16年12月に、アンケート票を AO 入試合格者の自宅へ郵送することにより実施。平成15年は配布40通に対して39通返送(回収率97.5%)、平成16年は配布47通に対して42通返送(回収率89.4%)。

### ③ 学内調査

平成15年11月及び平成16年12月に実施。平成15年はウェブアンケートで実施し141人中71人が回答(回収率50.4%)、平成16年はプリント配布にて実施し141人中50人が回答(回収率35.5%)。

なお、以下では、平成15年に実施した調査を「平成16年度調査」と呼び、平成16年度に実施した調査を「平成17年度調査」と呼ぶこととする<sup>6)</sup>。表3～表19中に現れる「16年度」は「平成16年度調査」の結果を、「17年度」は「平成17年度調査」の結果を表したものである。

鳥取大学では、上記アンケート調査に加え、平成15年度、16年度に、年間約150校に対する高校訪問を実施し、AO入試に関するヒアリングも行った。平成17年度 AO 入試に関しては、これら調査結果をもとに、以下の変更を行ったものである。

- 工学部が実施していたエントリー方式を廃止した。併せて、出願期間をできる限り遅くした。
- 第1次選考を書類のみの選考から、面接を含めた選考にした(その際、受験生の旅費負担を軽減するため地方会場を設置した)。
- 第2次選考終了後から合格発表までの期間を約1週間圧縮した。

また、合格発表後、特に、合格者が全く出なかった高等学校については、可能な限り高等学校を訪問し、競争倍率の説明等 AO 入試に関する情報提供を行った。

2.3 鳥取大学 AO 入試に関する高等学校の評価について

福島(2005)では、平成 17 年度 AO 入試における変更点及び情報公開のあり方等について、高校教員調査、合格者調査の結果をもとに報告した。前項で記載した変更に関して、両調査とも概ね平成 17 年度調査では平成 16 年度調査より、良好な評価結果が得られた。特に、「第 2 次選考から合格発表までの期間」や「第 1 次選考の選考方法としての妥当性」に関する項目では、平成 17 年度は前年度に比して、かなり高い評価を得ることができた。

本稿では、福島(2005)で報告できなかった結果について、報告する。

2.3.1 出願期間について

高校教員調査(表 3)においては、両年度とも「適当」の回答比率がもっとも多いが、それ以外の選択肢では「早すぎる」「早いが気にならない」等が選択されており、時期の早さを感じていることがわかる。合格者調査(表 4)では「適当」が両年度とも約 70%以上選択されている。

表 3 出願期間について

	高校教員調査(%)	
	17 年度	16 年度
早すぎる	10.2	13.5
早いが気にならない	27.3	22.3
適当	50.0	57.4
遅いが気にならない	4.5	1.4
遅すぎる	2.3	2.0
どちらとも言えない	2.3	2.0
その他	3.4	1.4

表 4 出願期間について

	合格者調査(%)	
	17 年度	16 年度
早すぎる	4.8	10.5
早いが気にならない	16.7	10.5
適当	69.0	76.3
遅いが気にならない	4.8	0.0
遅すぎる	2.4	0.0
どちらとも言えない	2.4	0.0
その他	0.0	2.6

2.3.2 第 2 次選考の選考方法について

第 1 次選考の選考方法については、「妥当である」との評価が飛躍的に向上したことを福島(2005)で報告したが、第 2 次選考については、高校教員調査(表 5)、合格者調査(表 6)とも、両年度で大きな差異は見られない。

表 5 第 2 次選考の選考方法について

	高校教員調査(%)	
	17 年度	16 年度
妥当	55.4	50.0
ある程度は妥当	34.9	40.4
あまり妥当ではない	7.2	3.4
妥当ではない	0.0	0.7
どちらともいえない	2.4	5.5

表 6 第 2 次選考の選考方法について

	合格者調査(%)	
	17 年度	16 年度
妥当	76.2	76.9
ある程度は妥当	19.0	20.5
あまり妥当ではない	2.4	2.6
妥当ではない	0.0	0.0
どちらともいえない	2.4	0.0

第 2 次選考については、両年度で実施方法に大きな差異はないため当然の結果とも言える。また、高校教員と合格者では、合格者の方が、選考方法に高い妥当性を感じているこ

とがわかる。

### 2.3.3 鳥取大学 AO 入試を勧められるかについて

高校教員調査(表 7)については、平成 16 年度より平成 17 年度の方が、生徒に「強く勧める」の比率が 2.7%、「タイプによっては勧める」の比率が 12.8%向上した。一方、合格者調査では、両年度とも、後輩に「強く勧める」が約 30%、「タイプによっては勧める」が約 65%と、ほぼ差異はなかった。

表 7 鳥取大学 AO を生徒に勧めるか

	高校教員調査(%)	
	17 年度	16 年度
強く勧める	14.9	12.1
生徒のタイプで勧める	78.7	65.9
あまり勧めない、希望があれば	6.4	18.3
全く勧めない	0.0	1.2
わからない	0.0	2.4

### 2.3.4 一般的な AO 入試へのイメージ

鳥取大学 AO 入試への評価についての質問項目ではないが、前項と対比させる上で、表 8 のデータを掲げる。高校教員調査のみの質問項目であるが、表 8 を見ると両年度ではあまり差がなく、「大変肯定的」が約 20%、「やや肯定的」が 40%強という比率である。前項の結果だけであると、鳥取大学 AO 入試のみならず一般的な AO 入試の評価が上がったとも解釈できるが、その解釈はこの結果によって否定されると考えられる。

表 8 一般的な AO 入試に対するイメージ

	高校教員調査(%)	
	17 年度	16 年度
大変肯定的	20.0	22.1
やや肯定的	44.7	42.8
どちらでもない	18.1	16.6
やや否定的	12.9	17.2
大変否定的	3.5	1.4

### 2.3.5 鳥取大学 AO 入試実施時期の見直しについて

本質問項目も高校教員調査のみの項目である。実施時期に問題があるというマイナスイメージを持たれがちな AO 入試ではあるが、表 9 を見ると、平成 17 年度では「今のままで十分である」の比率が 50%を超えていることがわかる。しかしながら、実施時期の見直しを「強く望む」「ある程度望む」の合計は両年度とも 30%を超えており、時期を問題とする声は依然として大きい。

表 9 AO 入試実施時期の見直しについて

	高校教員調査(%)	
	17 年度	16 年度
強く望む	7.6	13.1
ある程度望む	25.9	32.4
現状で仕方がない	15.3	22.1
今のままで十分である	51.8	32.4

### 2.3.6 鳥取大学 AO 入試の募集人員について

この質問項目も高校教員調査のみの項目である。平成 16 年度調査では「ある程度望む」の比率が 39.6%ともっとも大きかったが、平成 17 年度調査では「今のままで十分である」の比率が 48.2%と過半数近くを占めるほど大きくなっていることがわかる。なお、鳥取大学 AO 入試の募集人員は平成 16 年度 31 名、平成 17 年度 36 名と増加している。

表 10 AO 入試募集人員の増加について

	高校教員調査(%)	
	17 年度	16 年度
強く望む	7.2	15.3
ある程度望む	33.7	39.6
現状で仕方がない	10.8	11.8
今のままで十分である	48.2	33.3

### 2.3.7 AC の認知度について

鳥取大学 AO 入試への評価とは直接関係は

ないが、ACの存在が高等学校、受験生にどの程度浸透しているのか調査した結果を、表11、表12に示す。高校教員調査(表11)では、平成17年度に認知度が高まっているという様子が見られるが、合格者調査(表12)では、逆の結果となっていることがわかる。受験生にとっては、ACという組織自体には、なじみが薄いということがわかる。

表11 ACをこれまでに知っていたか

	高校教員調査(%)	
	17年度	16年度
知っていた	67.1	60.0
名称は知っていたが、 鳥大にあることは知らなかった	29.1	32.4
名称自体初めて聞いた	7.0	7.6

表12 ACを受験前に知っていたか

	合格者調査(%)	
	17年度	16年度
知っていた	23.8	34.2
名称は知っていたが、 鳥大にあることは知らなかった	14.3	26.3
名称自体初めて聞いた	47.6	39.5

#### 2.4 鳥取大学 AO 入試に関する学内の評価について

平成17年度について、高校教員調査、合格者調査の結果から、鳥取大学 AO 入試は評価を向上させたことが明確になった。では、一方で、AO入試を実施する側の鳥取大学教職員の評価はどうであろうか。

以下では、学内調査の結果を示しながら、学内者のAO入試に対する評価を述べる。

##### 2.4.1 第1次選考の選抜方法について

学内調査において、第1次選考の選抜方法について質問した結果が、次の表13である。

表13 第1次選考の選抜方法について

(%)	17年度	16年度
すぐに考え直すべき	34.0	19.7
様子を見ながら見直しを検討	14.9	24.2
どちらともいえない	38.3	37.9
妥当なので検討の必要なし	6.4	6.1
その他	6.4	12.1

両年度ともに、「どちらともいえない」が40%弱ともっとも大きい比率である。しかしながら、平成16年度では「すぐに考え直すべき」の比率が19.7%だったが、平成17年度では34.0%と、かなり大きな比率を占めるようになってきている。ネガティブな評価が大きくなったわけであるが、高校教員調査では、平成17年度の評価が高かったことから、AC専任教員による面接を導入することに対する評価が、学内と学外(高校教員調査)とでは、逆の傾向を示していることがわかる。

##### 2.4.2 第2次選考の選抜方法の妥当性について

鳥取大学 AO 入試では、第2次選考の選抜方法については、平成16年度、平成17年度ともに、大きな変更はない(表2を参照)。すなわち、各学科の教員がそれぞれの学科が掲げたAPに即して、多様な選抜方法を実施するものである。表14は、「あなたが所属する学科の第2次選考の選抜方法は、APどおりの学生を確保するのに妥当な方法であったか」を聞いた結果である。

表14 第2次選考の選抜方法の妥当性について

(%)	17年度	16年度
全く妥当	8.2	9.2
まずまず妥当	55.1	50.8
あまり妥当ではない	8.2	15.4
全く妥当ではない	8.2	4.6
学科のAPを知らない	4.1	6.2
わからない	16.3	13.8

学内調査では、学科がそれぞれ実施している第2次選考の選抜方法については、妥当なものだと感じていることがわかる。前項の結果と併せて考えると、学科主導で実施する第2次選考は妥当で、AC主導の第1次選考は考え直すべきという意向が、看取される。

表15は「受験生は、あなたの学科の第2次選抜で、APに即して丁寧に選抜されたかと思っ

表15 受験生は、第2次選考ではAPに即して丁寧に選抜されたかと思っ

(%)	17年度	16年度
強く思っている	19.6	20.0
ある程度思っている	52.2	53.3
あまり思っていない	17.4	13.8
全く思っていない	4.3	3.1
その他	6.5	10.8

これを見ると、両年度とも「強く思っている」「ある程度思っている」の合計が70%を超える比率であることがわかる。しかしながら一方で、「あまりも思っていない」「全く思っていない」の合計も、両年度ともに20%前後の比率であり、選抜方法にまだ改善の余地があることを自覚している様子がうかがえる。

#### 2.4.3 受験生の印象について

受験生の印象について聞いた結果が、表16である。

表16 受験生の印象について

(%)	17年度	16年度
期待以上	4.2	15.8
期待通り	29.2	35.1
どちらでもない	16.7	22.8
あまり期待通りではない	18.8	8.8
期待はずれ	22.9	3.5
その他	8.3	14.0

「期待以上」「期待通り」等のポジティブな評価に関しては、いずれも平成17年度は平成16年度より、低い比率を示している。特に「期

待以上」については、10%以上も比率を下げている。

平成16年度AO入試は、募集人員31人に対し、受験者は222人であった。学科によって偏りは大きいですが、入試時点での平均競争倍率は7.2倍である。一方、平成17年度AO入試は、募集人員36人に対し、受験者は209人であり、平均競争倍率は5.8倍と前年度より下がっている。このことが「期待通り」にいかない理由とも考えられる<sup>7)</sup>。

#### 2.4.4 当該年度AO入試の満足度

それぞれの年度のAO入試について、実施後の満足度を聞いた結果が、表17である。

表17 当該年度のAO入試に対する満足

(%)	17年度	16年度
大変満足	4.1	6.0
ある程度満足	24.5	34.3
どちらともいえない	22.4	32.8
少し不満	14.3	9.0
大変不満	30.6	11.9
その他	4.1	6.0

平成16年度と平成17年度を比較すると、「大変満足」は6.0%から4.1%へと微減、「ある程度満足」は34.3%から24.5%と10%以上比率を下げている。一方、「少し不満」は9.0%から14.3%へと、「大変不満」は11.9%から30.6%へと3倍近くに激増しており、満足度は明確に下がったといえる。先述した競争倍率の問題もあるかも知れないし、この理由に関しては今後詳細な分析が必要である。

#### 2.4.5 AO入試へのイメージの変化

学内調査は、AO入試に関係した全ての教職員に対して実施しているものである。当該年度の「AO入試を実施する以前と実施した後では、AO入試に対するイメージは変わりましたか」という質問に対する回答結果が、次頁の表18である。

表 18 AO 入試実施後のイメージの変化

(%)	17年度	16年度
一貫して良い	21.7	12.9
実施後よくなった	6.5	33.9
実施後悪くなった	10.9	9.7
一貫して悪い	32.6	16.1
その他	28.3	27.4

平成 16 年度と平成 17 年度を比較すると、平成 16 年度では「一貫して良い」「実施後良くなった」の合計が 46.8%と、「一貫して悪い」「実施後悪くなった」の合計である 25.2%より大きい、平成 17 年度では「一貫して良い」「実施後良くなった」の合計が 28.2%と、「一貫して悪い」「実施後悪くなった」の合計である 43.5%より小さい。学内では、AO 入試に対するイメージが悪くなっていることが明確に看取される。

#### 2.4.6 次年度 AO 入試の募集人員について

AO 入試の募集人員をどうすべきかを聞いた質問に対する回答の結果を示したものが、表 19 である。両年度を比較すると、「大幅に増やすべき」は 6.2%から 4.1%へと微減、「少し増やすべき」は 23.4%から 25.5%へと微増であるが、一方、「少し減らすべき」は 0.0%から 6.4%へ微増、「大幅に減らすべき」は 0.0%から 4.3%へ微増、「やめるべき」は 10.9%から 23.4%へと倍増していることがわかる。

表 19 次年度 AO 入試の募集人員について

(%)	17年度	16年度
大幅に増やすべき	4.3	6.2
少し増やすべき	25.5	23.4
どちらでもない	29.8	43.8
少し減らすべき	6.4	0.0
大幅に減らすべき	4.3	0.0
やめるべき	23.4	10.9
その他	6.4	15.6

#### おわりに

以上の結果から、鳥取大学平成 17 年度 AO 入試に関して、学内調査における AO 入試への評価と、学外調査における AO 入試への評価には、明確な差異が見られることがわかった。すなわち、学内での評価は総じて低く、学外での評価は高いことがわかった。この理由については、今後さらに詳細な分析が必要であると考えられるが、重要なことは AO 入試に対する評価のあり方である。

今回の調査では、高校教員、合格者等学外者からの鳥取大学 AO 入試に対する評価は向上している。前年度 AO 入試実施後の諸アンケート結果に見られた高校教員等学外から要望に極力配慮する形で、第 1 次選考に面接試験を導入し、地方会場を設置し、出願期間を可能な限り遅くし、第 2 次選考から合格発表までの期間を圧縮する等の努力に対して、学外からポジティブな評価が明確に表れた。経済的にも時間的にも大変なコストをかけた改善だけに、学内教職員にとってはかなり負担が大きくなるものであったが、成果として、評価が高まったわけである。

しかしながら、これが逆の結果になることもあるだろう。すなわち、大変なコストをかけて入試の改善を行い、学内教職員の満足度や評価は高まったが、一方で学外からの評価は低くなるというケースである。このケースでは、学内教職員の徒労感は大きく、AO 入試に対して、さらにネガティブな印象になる可能性もある。

ただし、繰り返し強調したいのは、AO 入試の評価を、決して AO 入試の実施者である学内(大学側)からだけの一面的な評価に終わらせてはならないということである。

AO 入試の評価に関しては、定型的な方法が、いまだに構築されていないのが現状である。現在主流である入学後成績追跡調査は、

AO入試の実施者である大学側から見て、「(成績の)よい学生」を選抜できたかどうかという一面的な評価でしかなく、高大接続の観点から見たときには、適正な評価とは言えない。

大学入学者選抜は、教育活動の一環である。高等学校や受験者から信頼して受験してもらうためには、高等学校や受験者側からポジティブに評価されるAO入試を実施する必要があるが、当然ながら大学側にはある。今回調査で見られたような、大学外からの評価と、大学内の評価の差異は、現在の大学入学者選抜が抱える大きな問題を明示しているといえる。筆者は、教育活動の一環として、高大接続をスムーズに促すために入学者選抜が存在しているのではなく、入学者選抜を挟んで高大が両側に対峙している、そういった構図をここに見てしまうのだ。

高等教育機関の「評価」の時代において、AO入試を実施している側が、第三者評価に耐えうる多面的なAO入試評価モデルを構築することは、急務であると考えられる。

## 注

- 1) 「(2) 教育の内容等に関する目標」に入試制度の記載があることからわかるように、入学者選抜(学生の受入)は教育活動の一環として捉えられている。
- 2) 平成18年度入試においてAO入試を実施した29国立大学法人について調査した結果、29大学中12大学については、成績追跡調査を明記しているが、その他の大学については、点検・評価の方法に関する具体的記述はなかった。
- 3) 詳細については、福島(2005)を参照されたい。  
なお、平成10年10月26日大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について- 競争的環境の中で個性が輝く大学 -」を受けた大学評価関係法令の法改正に伴い、大学評価・学位授与機構は平成12年度～平成14年度までを試行的実施期間として、大学評価を実施した。平成12年度評価着手分において、京都大学医学部は、

「学生受入方針」について、「学生の教育目標が掲げられているが、その内容と選抜方法については、十分ではない」とされ、「面接の導入」について検討を促されている。しかしながら、「面接」の試験としての客観性を問題視する京都大学に対して、どのような方法による「面接」が選抜方法として適切なのかといった面接自体の内容については、機構は何ら示していない。

- 4) これについても詳細は福島(2005)を参照されたい。
- 5) 本稿を執筆している現在、平成19年度AO入試を実施している。なお、平成18年度に関しては、平成17年度をほぼ踏襲する形で実施した。
- 6) これは、入学者選抜方法の呼び方に由来する。すなわち、平成15年に実施したAO入試は「平成16年度AO入試」であり、平成16年に実施した入試は「平成17年度AO入試」であることから、このように呼ぶこととした。
- 7) 実際には、入学後にならないと不明な部分もある。平成16年度AO受験者と比して、平成17年度受験者はどうかと聞いた質問には、「わからない」を回答した者が52.1%と、過半数を超えて高い比率であった。

## 参考文献等

- 福島真司, 2006, 「AO入試の評価について- 鳥取大学AO入試に関する諸調査結果から -」, 『大学入試ジャーナル』16, 89-97
- 中村肖三・福島真司, 2006, 「進化するAO入試- “青い鳥”を求めて -」, 『大学入試ジャーナル』16, 83-88
- 白川友紀・島田康行・渡邊公夫・山根一秀, 2005, 「筑波大学工学システム学類AC入試追跡調査 - 卒業までの4年間の総括」, 『大学入試ジャーナル』15, 99-104
- 白川友紀・島田康行・渡邊公夫・山根一秀, 2004, 「筑波大学AC入試追跡調査 - 平成12年度入学者の3年目と14年度入学者」, 『大学入試ジャーナル』14, 65-71
- 渡辺哲司, 2005, 「AO入試と大学における学習」, 『大学教育学会誌』27(1), 146-151
- 渡辺哲司・島田康行・白川友紀・武谷峻一, 2006, 「指導教員による4年次学生の評価と入学者選抜方法」, 『第1回全国大学入学者選抜研究連絡協議会研究予稿集』,

119-124

独立行政法人大学評価・学位授与機構ウェブサイト

平成 12 年度着手分大学評価

(平成 14 年 3 月評価結果公表)

分野別教育評価「医学系 (医学)」

[http://www.niad.ac.jp/sub\\_hyouka/kyoiku/igaku/houkoku/main.htm](http://www.niad.ac.jp/sub_hyouka/kyoiku/igaku/houkoku/main.htm)

文部科学省ウェブサイト

1998/10/26 答申等

21 世紀の大学像と今後の改革方策について - 競争的環境の中で個性が輝く大学 - (答申)

(平成 10 年 10 月 26 日大学審議会)

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/12/daigaku/toushin/981002.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/daigaku/toushin/981002.htm)